

エッセイ集

『出雲国風土記』と松江の歴史ー エッセイ2

『出雲国風土記』の山 登頂記

— 「風土記の山」の風景と魅力 —

三代 隆司



【表紙写真】 大草町岩屋後古墳から茶白山を望む（『出雲国風土記』の神名樋野）

1

現在の山と『出雲国風土記』記載の山との比定は、島根県古代文化センター編『出雲国風土記―校訂・注釈編―』によりますが、一部そのほかの注釈書も参考にしています。

2

著者は、元出雲国ジオパークの会事務局長 三代隆司さんです。

3

登頂記の一部は、「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会発行 より転載しています。転載している項目は、末尾に記載しています。そのほかの文章は、三代隆司さんの書下ろしです。

4

写真は、著者の三代隆司さんが撮影したものです。写真の引用はかまいませんが引用先（『出雲国風土記』と松江の歴史）を明記してください。

5

各文末に、『出雲国風土記』の読下し文を記していますが、『松江市史 史料編3 古代・中世I』からの引用です。

6

「『出雲国風土記』と松江の歴史」は次頁の9編を公開しています。本編と一緒に、是非ご覧ください。

〈公開中〉

A 本文編 (全5章)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147298>

B 詳細解説編

1 『出雲国風土記』と松江の山と野 詳説

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147302>

C エッセイ集

1 『出雲国風土記』の郷の伝承 (松江市編) [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147303>

本編

2 『出雲国風土記』の山 登頂記—「風土記の山」の風景と魅力— [三代 隆司]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147304>

3 『出雲国風土記』にみる古代人のレジャーと観光 (松江市編) [森田 喜久男]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147305>

D コラム集

1 地質学からみた『くにびき神話』 [野村 律夫]

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147306>

2 『出雲国風土記』の布自枳美高山・女嵩山と嵩山・和久羅山

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147307>

3 『出雲国風土記』に登場する豪族 出雲臣と社部臣

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147308>

E 読下し編

(松江市部分 巻首・意宇部・島根郡・秋鹿部・巻末の一部)

<https://sitereports.nabunken.go.jp/147309>

目次

1. 京羅木山（高野山）	001
2. 天狗山（熊野山）	004
3. 黒目山（久多美山）	007
4. 花仙山（玉作山）	009
5. 茶臼山（神名樋野）	011
6. 嵩山（布自枳美高山）	014
7. 和久羅山（女岳山）	014
8. 澄水山（毛志山）	017
9. 枕木山（大倉山）	021
10. 三坂山（糸江山）	017
11. 大平山（小倉山）	017
12. 朝日山（神名火山）	023
13. 経塚山（足日山）	026
14. 本宮山（安心高野）	028
15. 十膳山（都勢野）	031
16. 室山（今山）	034

1

京羅木山（きょうらぎさん） （「高野山」）

京羅木山は松江市と安来市の境にある。標高473メートルの山頂は戦国時代に毛利氏が、安来市広瀬町にある月山富田城（がっさんとだじょう）に立て籠（こも）る尼子氏を攻める拠点とした山城があったことで知られる。



京羅木山（左）と星上山（右） 大根島から

山頂から南側を見下ろすと、近年城を覆い隠していた森林が取り払われて城の全容が顕になった月山富田城が、上から絵図でも見るように丸見えである。とても小さいが、人が歩き回るのも見える。尼子軍は見られていたのだ。



京羅木山から月山富田城を望む

東に目をやると大山が美しい裾野を広げている。加えて大根島を浮かべた中海、松江の街の向こうに宍道湖も見える。尼子氏の月山での敗戦は、宍道湖、中海を毛利水軍に抑えられ、

飯梨川を富田城に向けて登る兵糧の途絶だったという。

頂上にリュックも背負わないで年配の男性が上がって来た。聞くと、今日は山登りのトレーニングだそうで、朝方は月山に登るつもりだったが、天気が良いので、こちらにしたという。そして、めったに無いことだがと前置きして

教えてくれたのは、コンディションが良ければ、島根半島のすぐ向こうに隠岐島が蜃気楼のよう大きく見えることがあると。



山頂より大山を望む



出雲金刀比羅宮

登る途中、山頂の手前で山伏塚の説明看板があったので、脇道へ外れて行ってみた。細い道が途中で途切れ、道案内のピンク色のテープを頼りに進むと、なんとか磐座に着いた。大岩の他に山伏が護摩壇に使ったという石積みの跡もあった。おすすめめの山は行き着くところ修行場か戦場なのだ。

おすすめのルートは、東出雲町の干し柿の産地にある「おちらと村」からである。登山道の途中には毛利氏が戦勝祈願のために建てたと伝わる出雲金刀比羅宮（ことひらぐう）がある。山頂からは、星上山へ向かって歩き、縦走路が下がった鞍部で右手に分かれて下山すると「おちらと村」に帰ってくる周回ルートがある。



山伏塚

特産品の干し柿は、毛利軍が兵糧の一つに干し柿を持参し、その種から柿が芽を出したものと伝わる。美味しい干し柿の出荷は12月から1月。この時期の晴れ渡った日、隠岐は見えるだろうか。

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

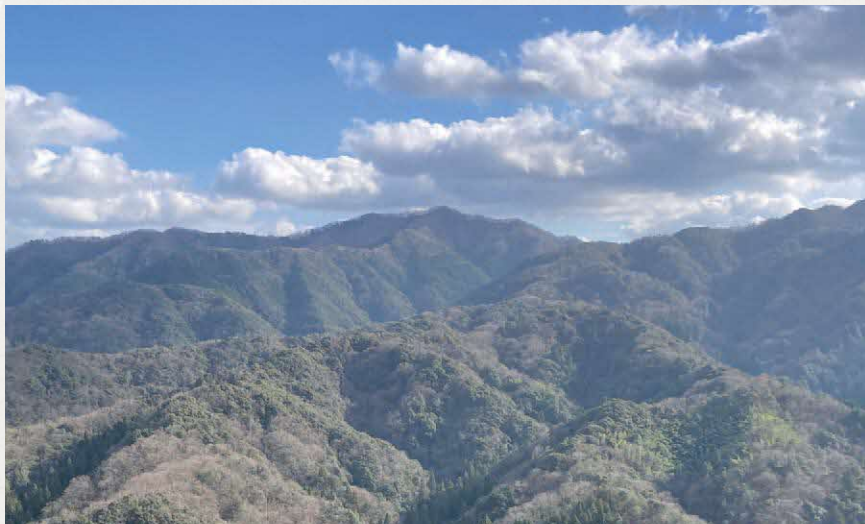
「高野山（たかのやま）。郡家の正東一十九里なり。」

意宇郡 山条

2

天狗山（てんぐやま） （「熊野山」）

天狗山は松江市最高峰の山。標高は610.4メートル。『出雲国風土記』には熊野（くまぬ）山とあり、「熊野大神の社坐す」としている。松江市八雲町の熊野大社の元宮があった山である。



正面の熊野城址から見た天狗山

登山口から山頂までは、およそ2キロメートル、険しい山道を登ると、その山頂はわずかに平らになっており、意宇川が注ぐ中海や宍道湖を遠くに望むことができる。山道の途中には天狗の泉とも呼ばれる意宇川の源もある。



登山口付近にある鬚（かもじ）が滝

昭和44年に元宮顕彰を志す人々によって、笹などが刈られ道普請がされ、今の山道が姿を現して以来、毎年5月第四日曜日に神職と一般の参拝者が列をなして登拝し元宮祭が執り行われていた。しかし、数年前から行われていないという。

以前その祭礼に参加したことがある。斎場は元宮成（げんぐがなり）と呼ばれる頂上の少し手前にある磐座のある場所。20メートル以上はあるゆるやかな斜面の上に白い垂（しで）の下がったしめ縄が小さく見える。50名あまりの登山姿の老若男女が参拝した元宮祭が終わり、登って磐座に近づくと、背丈より高い大岩五つが並んでいた。その高さは4メートル、幅は10メートルぐらいもありそうだった。見下ろすと、人の頭ほどある石がゴロゴロした石原の向こうに参拝の人々が小さく見えた。



登山道にある意宇川の源流



山頂の手前にある元宮跡の磐座

祭礼に参加していた島根県の文化財担当の学芸員に磐座のことを聞いたら「まるで磐座が子どもを産んでいるように見えましたでしょう」と言われた。下山後にあった彼の講演は、出雲の山に坐す神について、神名火山や磐座の話だった。古代人は、空や雲から山に神が宿ると感じていたようだ。



山頂から松江市街地が遠望できる

『延喜式』では、熊野大社の祭神は櫛御気野命（くしみけぬのみこと）とある。「ミケ」は「御食」の意味で食物神とする説が通説である。古代には、あの磐座に櫛御気野命が坐していたのだ。

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

「熊野山（くまのやま）。郡家の正南（まみなみ）一十八里なり。檜・檀（まゆみ）あり。謂はゆる熊野大神（くまののおおかみ）の社（やしろ）坐ます。」

意宇郡 山条

3

黒目山（くろめやま） （「久多美山」）

黒目山は忌部からその美しい姿が望める。登山道は失われているようで、昔は校歌に「黒目の山は陽に映えて～」と歌う忌部小学校の学校事業として子どもたちが登っていたようだが、それも行われなくなったようだ。



西忌部町の県道24号線松江木次線方向から見た黒目山



久多美神社参道脇の田に映る黒目山

2021年に忌部公民館の歴史研究会の有志が集って黒目山登山の復活を目指して登られた。途中から道なき道を登り、相当苦勞されて、かつて山城があったという平坦な山頂に辿り着かれたようですが、雑木林となっていて眺望（東は大

山、西は大社、南は中国山地、北は日本海を眺望できると言われている）は無かったとのことである。山の標高は243メートルである。

今、黒目山の北側の麓には久多美神社がある。社伝では、弘安元（1278）年に佐々木信勝が黒目山頂上に築城した折り、頂上にあった社を麓に移したと伝わる。美しい山容の山は、『出雲国風土記』にある久多美山と考えられており、その頂上に久多美神社が鎮座した時代があったものと思われる。



久多美神社から 右手奥が黒目山



久多美神社本殿

『出雲国風土記』読下し

「久多美山（くたみやま）。郡家の西南二十三里なり。檀（まゆみ）あり」

意宇郡 山条

4

花仙山（かせんざん） （「玉作山」）

宍道湖のほとりに建つ松江市役所から宍道湖の北を望むと、松江の街並みの外れから玉造にかけて低山が横に長く続いているのが見える。これが標高200メートルのメノウが採れた花仙山である。山頂は玉造温泉寄りの高まりである。



松江市役所から見た花仙山の山なみ

花仙山の中腹には林道が通っており、その林道から山頂まで遊歩道のようなものがある。平成25年ごろに整備されたものようだが、今では春先3月ごろに草刈りされた後には歩きやすいが、その他は冬となるであろうか。国土地理院の地図では、道が示されている。遊歩道の入り口に駐車して、遊歩道を800mほど進む、5月ゴールデンウィークに歩いたら草刈りがされていてののだが、途中イノシシが荒らした道が凸凹していたりして、遊歩道というよりは山道という感じだった。山頂に着くと木製のベンチやテーブルがあって、ベンチの並ぶ場所は、宍道湖の展望も良



登山道

かっただろうと想像された。今は木々の向こうにわずかに宍道湖の湖面が見える程度である。



山頂のベンチ（奥は宍道湖）



ベンチの場所から木々の向こうに
宍道湖がわずかに見える

頂上付近の地面を見ると赤土である。花仙山は約1500万年前に陸上に噴出した溶岩（安山岩）である。特に溶岩が冷えて固まる時にできた割れ目や地殻変動などでできた隙間に地下水が流れ込み、その地下水に含まれる石英の成分が沈澱してメノウが形成された。特に花仙山の西麓では、地下深くまで安山岩が風化した赤土になっており、良質のメノウを掘り出しやすかったと考えられる。

この土中のメノウを見ることができ
る施設がある。花仙山の西麓にめのう
公園駐車場があって、そこから、めの
う公園採掘穴跡に行くと、赤土の中に
緑色のメノウ脈を見ることができる。
また、先の花仙山頂上へ行く登山道入
り口は、めのう公園駐車場を通り過ぎ
て坂を上り、出会った林道を右に折れ
て100mほどの場所にある。



めのう公園採掘穴跡のメノウ脈

『出雲国風土記』読下し

「玉作山（たまつくりやま）。郡家の西南三十二里なり。檀（まゆみ）あり」

意宇郡 山条

5

茶白山（ちやうすやま） （「神名樋野」）

茶白山は『出雲国風土記』には、神名樋野（かんなびの）とあり、続けて、東に松があり他の三方には茅（かや）があると書かれている。風土記に載る四つの神が隠れ籠る山、神名火山（かんなびやま）の一つである。ススキに代表される茅などの草に覆われていたようで、古代には山ではなく野と呼んだ。

標高は171メートルと毎日登る人もあるような低山で、登山道のおすすめはガイダンス山代の里から歩いて登山口に向かうルート。西口登山道の看板がある民家の脇から登る。看板には山頂まで450メートルとあるが、最初は急な上り坂で、へこたれそうになる。

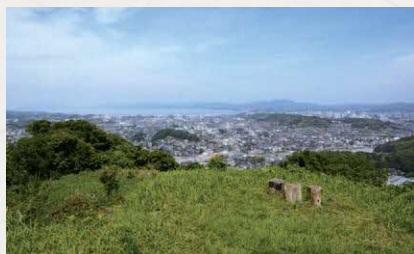


意宇川の上空から茶白山を望む（ドローン撮影）

ここで頑張って下ばかり見て歩くと、途中にある紙垂（しで）の下がった荒神さんや社日さんなどに気がつかないかもしれないからゆっくり登る。それでも三十分かからず山頂に着く。ここは近頃人気のトレイルランニングをする若い人もいて、彼らは十五分とかからぬ速さで駆け登ってくるので、びっくりすることがある。



茶白山 山道途中の社日さん



山頂から穴道湖方面の景色



山頂から中海方面の景色

山頂は東西に40メートルほど平らな草原が広がり小さな桜の木がある。北に目をやると左手に穴道湖、右手には中海が見え、その向こうに島根半島の山並みが出雲から美保関まで連なっている。その右に見える弓ヶ浜から美しい大山の姿へと続き、そこから南の眼下には出雲国庁跡のある意宇平野、その向こうに中国山地を望む。そのまま西の遠くに、出雲の神名火山である仏経山まで見えるのである。ほぼ三百六十度パノラマの景色を満喫できる。



山頂のパノラマ景色

このどっしりとした山容の茶白山は嫁ヶ島などと同じく、およそ1千万年前に活動した玄武岩のち密な黒灰色の溶岩でできた山である。その見晴らしが良いからだろう、戦国大名の尼子氏の山城があった。頂上付近で登山道が下って谷ようになった場所は、敵を上から撃ち城を守る堀切（ほりきり）の跡だ。



山頂から見た出雲国府跡



出雲国府跡からの春の山容

また、中腹の登山道近くには、今は古志原にあって山代日子（やましろひこ）命を祀る山代神社の元宮があったというから、神名樋野に隠れ籠り坐（ま）していたのはこの神であろう。麓の国庁跡から茶臼山を望むと、その山容は美しく優しげである。

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

「神名樋野（かんなびの）。郡家の西北一百二十九歩なり。高さ八十丈、周り六里三十二歩あり。東に松あり。三方は並びに茅（ち）あり。」

意宇郡 山条

6

嵩山（だけさん）と 和久羅山（わくらやま）

7

（「布自枳美高山（ふじきみのたかやま）、 女岳山（めだけやま）」）

古くから松江の人々に親しまれてきた嵩山と和久羅山は、『出雲国風土記』には「布自枳美高山（ふじきみのたかやま）」と「女岳山（めだけやま）」とあり、嵩山には烽（とぶひ）と呼ばれる狼煙台（のろしだい）があった。

二つの山はデイサイト質の粘り気のある溶岩でできた一つの山塊で、狼煙はお似合いである。最近の研究によると70～90万年前に形成されたと考えられている。山容は、ビルに登るか遠くに離れないと望めなくなった。



松江市街から見える嵩山（左）と和久羅山（右）

西側から望むと涅槃仏（ねはんぶつ）に似ることから寝仏（ねぼとけ）さんと呼ばれる。左の高い山が嵩山で胴体をなし、右のやや低い山が頭部となる和久羅山。ちなみに大根島からは「キューピーさん」として親しまれている。理由は見比べると分かる。



大根島から嵩山（右）と和久羅山を望む



登山道に咲くササユリ

嵩山（標高331メートル）は山腹の駐車場からは30分ほど登れてしまう。途中、6月には白く可憐なササユリの花が涼となり、隣の和久羅山（標高262メートル）では小さな群生も見られる。

嵩山山頂からの景色を、出雲富士は築山、中海は心字池、大根島が蓬莱山、弓が浜が垣根、その奥は無限の大海原の日本一の庭園だ。と絶賛した人もあった。



和久羅山から宍道湖方向を見る



和久羅山から中海・大山を見る

ここには、小泉八雲も登ったという。嵩山という短文には、「頂上に登ると昔の国が見渡せる。高さや形が何となく人間に似た岩が垂直に立っている」とあり、愛しい人を待ちわびた姫が石に変わってしまった。という物語が続く。

戦時中には、戦地に行った家族の帰りを待つ人々が祈願に登り、そこにあった小石を持ち帰り、念願叶うとその小石と余分の小石を持って頂上の石塚にお返しに行ったという。しかし、人の形をした石塚は今の山頂には見えない。

この寝仏さんのササユリの保護や山道整備をして年に百回以上登るという平田忠男（85才、2024年時点）さんに聞いたら、それは今、布自岐美（ふじきみ）神社の背後にある小さな嵩（だけ）神社の祠の中に覆い隠されているらしいと

いう。平田さんに連れられて、麓の鳥居に至る旧参道や寝仏さんの鼻にあたる弥勒山へも行った。

この涅槃仏から登る満月を、普門院は観月庵の心字池に浮かべた時代もあった。



布自伎美神社の後ろにある嵩神社

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

「布自枳美高山（ふじきみのたかやま）。郡家の正南（まみなみ）七里二百一十歩なり。高さ二百七十丈、周り一十里なり。烽（とぶひ）あり。
女岳山（めだけやま）。郡家の正南二百三十歩なり。」

島根郡 山条

8

澄水山（しんじさん） （「毛志（もし）山」）

10

三坂山（みさかやま） （「糸江山」）

11

大平山（おおひらやま） （「小倉山」）

澄水山、三坂山、大平山の三山は、東川津を流れる朝酌川（あさくみがわ）あたりから良く見える。東にある枕木山からこの三山をつなぐように林道があって車でも簡単に頂上へ行けるので、登山を味わうには物足りないかと思っていたが、澄水山は、麓から勘介（かんすけ）の道と呼ばれる登山道が整備されていて、新緑や紅葉の季節は気持ちが良い。登っているとお地藏さんがあって、山頂の手前にあったという澄水寺（ちょうすいじ）への参拝道だったことが感じられる。開基が平安時代まで遡ると言われる澄水寺は、枕木山で修行した弁慶が鰐淵



下東川津町あたりから見る澄水山（中央）と三坂山（右）、大平山（左）

寺（がくえんじ）と澄水寺でも修行したと伝わる修験の地だったようだ。

半分ぐらい登ると「じい石」「ばあ石」と呼ばれる大きな岩があり、それを過ぎると山頂まで1000メートルの看板もあった。続いて休憩するのにちょうど良い昼寝石という横に長い大岩もあった。



登山道のお地藏さん



じい石

山頂には国土交通省の航空レーダー施設があって、立ち入り禁止であるが、その一步手前に勘介庵の跡という大きな石碑が立っていた。江戸時代、松江藩の足軽であった勘介が家老の娘「菊姫」と身分を乗り越えて愛を買った場所で、幕末から大正までこの地で生活していた。と解説されていて、ここは恋愛成就を祈願する場所らしい。

山頂には立てないが、山頂の雰囲気が味わえる場所がある。勘介庵の跡の石碑の裏山に澄水山の三角点（502.8メートル）がある。石碑の左側から裏山をほぼ真っ直ぐにある踏み跡をたどって50メートルほど登るとその三角点がある。



ばあ石



北山縦走登山口



勘助庵の跡の石碑

勘介の道の登山道入り口は坂本町にある麓から少し山に入った場所にある。登山道入り口には、北山縦走坂本登山口の標柱があった。そこから山頂まで1883メートルである。

この澄水山の登山であるが、山頂の脇に駐車できるので、ここから下って坂本登山口に至り、そこから登り返して、山頂に至るのが良いだろう。頂上付近に暮らした勘介は、ここから里に降りたりもしただろうから、そうした歩き方で偲んでみたらどうだろうか。そこでさらに時間があれば、大平山や三坂山に足伸ばす縦走もおすすめである。



三坂山から中海・大根島を望む



澄水山の麓 福原町の澄水寺

また、登山の参考になる登山コース地図が勘介庵の跡と持田公民館駐車場には掲げられている。なお、明治七年に移転した澄水寺はというと、福原町にある長慶寺境内に観音堂があり、今も出雲三十三番観音霊場の25番として親しまれている。その御詠歌は「山高く 登りて

見れば澄水（すみみず）の「流れの末は清き谷川」とあり、澄水寺が澄水山にありし日が偲ばれる。

参考

「ふるさと持田の彩」出版 持田公民館

「別所の由来」吉永壮志 2019年5月29日 持田公民館講座

澄水山を愉しもう～澄水山と近隣の登山ルートを紹介～ 野津貴章

<https://4234ee41f3c166ad.lolipop.jp/%E6%BE%84%E6%B0%B4%E5%B1%B1.pdf>

『出雲国風土記』読下し

「毛志山（もしやま）。郡家の正北一里なり。

大倉山（おおくらやま）。郡家の東北九里一百八十歩なり。

糸江山（いとえやま）。郡家の東北二十六里三十歩なり。

小倉山（おぐらやま）。郡家の西北二十四里一百六十歩なり」

意宇郡 山条

9

枕木山（まくらぎさん） （「大倉山」）

枕木山は松江城の鬼門（邪気の入る北東の方角）となるため、松江藩は、そこにあった華蔵寺を祈祷所にした。枕木さんと呼べば華蔵寺のことでもある。都が平城京から平安京に移る頃、天台宗の僧、智元上人が開基したというから、ここも山岳修行の寺であっただろう。



南側からの枕木山

華蔵寺からの景色も格別で松江市民には、とても良く知られる山である。本庄や持田からは車ででも行けるため、足で登るといった感覚は薄いだろうが、その昔、参拝道だっただろうと思われる山道が今も二つ残っている。一つは北側にある千酌の集落から登る道。もう一つは美保湾に面して住まいする人々が参拝に通ったと思われる。長海地区の長見神社の脇から忠山（ちゅうやま）に向う坂を上がり、峠の手前で左手の山中に分け入ると、華蔵寺に至るおよそ5キロメートルの尾根を進むなだらかな山道が開ける。

今回は、千酌海水浴場から2キロメートルほど千酌川を遡ったところにある登山道入口へ。道沿いに車が2、3台停められる。そこにあった標識には、枕木山山頂までは2.1キロメートルとある。道は木製階段なども整備されていて歩きやすい。半分の1キロメートルほどは登りが急なので、自分なりのペースで進むと

よい。途中からの展望は望めないが、道が急に緩やかになると第一展望台に出る。この展望台の木製テーブルのある場所から、日本海も大山の勇姿も僅かであるが遠望できる。

そこから弁慶の立石の下って行くと、麓にある本庄の亀島（弁慶島）から抜け出した弁慶が、華蔵寺での修行中に持ち込んだという高さ二メートル以上ある細長い石が立っている。

立石に行かず右手に向かうと、華蔵寺の境内に至る。華蔵寺は年々石楠花（しゃくなげ）を増やし、株も大きくなり4月下旬から5月中旬には見事な花を咲かせている。その庭園の一角に第二展望台があって、そこからは、大根島を抱えた中海の向こうに大山を望む雄大な景色を我がものにできる。

さて、頂上はどこか、華蔵寺ではないのだが？



弁慶の立石



しゃくなげの咲く華蔵寺



第二展望台から中海・大根島・大山を望む

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

「大倉山（おおくらやま）。郡家の東北九里一百八十歩なり。」

意宇郡 山条

12

朝日山(あさひさん) 〔「神名火山(かんなびやま)」〕

朝日山は白鳥の飛来する西浜佐陀の松江B & G海洋センターあたりから北西に見える台形のどっしりした山容の山である。『出雲国風土記』に記される四つの神名火山(かんなびやま)の一つである。

駐車場やトイレが整備された登山口は山の北側、古浦海水浴場がある集落の外

れにある。トイレの横から、まるで都会のビルの中でも登るかのような立派な石段が上に伸びているので驚くが、途中から普通の登山道となる。

登山口から30~40分ほど登ると大きな地藏さんや石灯籠のようなものが目に入ってくる。それは、島根半島の各地に見られる四国八十八ヶ所霊場巡りを模したミニ霊場巡りの石像である。それらを左の方へ進み小さな木橋をくぐると、出雲三十三番観音霊場の二十九番札所にあたる朝日寺(あさひじ)となる。

およそ1300年前の神亀年間に行基菩薩の開基と伝えられ、本尊の高さ二尺五寸の十一面観世音菩薩座像は行基作と伝わる。毎年5月1日から21日までこの

秘仏のご開帳があり、多くの参拝者で賑わう。この参拝者の多くは、山の南側を頂上付近まで車で上がって来られる。境内には大イチョウやモミジの木があり、新緑とともに紅葉も美しい。

お寺の東西に峰があって、どちらの峰からも松江市街、宍道湖、遠くに大山や隠岐の島を見ることができる。



南側からの朝日山



紅葉の朝日寺



朝日山西の峰より宍道湖、松江市街方向を望む

標高341メートルの東の峰には三角点があって、その南側の斜面に奥の院と呼ばれる大岩がある。先代の住職に聞いたのだが、昔は大岩が山の下の方からも見えていて、それが人の顔に見えるので人岩と呼んでいたのだそうだ。



人面岩



西の峰から雲海の絶景に浮かぶ寝仏さん、大山

なお、朝日山の最高点344メートルは西の峰である。斐伊川河口、さらに遠くに三瓶山も望むことができる。もし大山が見えたら、麓の日本海、美保湾も見えるだろう。この眺望に優れた峰々には、朝日寺の山名が付いており、西の峰は神宝山、朝日の美しい東

の峰は鎮朝山、お寺の背後の山は金峯山である。境内に狛犬も鎮座しており神仏習合の修験道の香りが漂っている。

「松江 山登り」『湖都松江』vol.48 2004年9月 松江市文化協会 より

『出雲国風土記』読下し

「神名火山（かんなびやま）。郡家の東北九里四十歩なり。高さ二百三十丈、周り一十四里あり。謂はゆる佐太大神（さだのおおかみ）の社は、即ち彼の山の下なり。

足日山（たるひやま）。郡家の正北（きた）七里なり。高さ一百七十丈、周り一十里二百歩あり。」

秋鹿郡 山条

※朝日山を「神名火山」とする説と、「足日山」を「あしひやま」と読んであてる説があり、双方の読下しあげました。

経塚山(きょうづかやま) (「足日山」)

経塚山山頂が近づくと、大きな丸い岩に遭遇する。高さおよそ5メートル、横幅は6メートルぐらいある。特に名前は示されていない。岩には1～5センチの穴が空いており、溶岩から気泡が抜けた穴と思われる。



経塚山玉湯町の宍道湖ふれあいパークより

そこから西へ200メートルあまりで経塚山の山頂となる、雑木林の中で眺望はまったく望めない。しかし、石を積みあげたような塚が一つ立っていた。積まれた石の一つには、文字が刻まれているのがわかる。人の名前のような感じもあるが、判別が難しいほど文字が薄くなっていた。



経塚山の山頂にあった塚



経塚山山頂付近にある丸い形の大岩

経塚山には、朝日山から足を伸ばして行ける山道がある。ただ、朝日山に登った感覚で経塚山へ足を伸ばすと道の険しさに音を上げることになるので要注意である。朝日山の西の峰から登山道が続いており、距離は片道お

よそ2.1キロメートルである。標高差は登り下りがそれぞれ約250メートル。途中でロープが6～7箇所を設置されている。古浦から長江に通じる古道の猪目道にある猪目峠に向かって朝日山から下って、そこから峠の西にある猪目山に登り、続いて経塚山へ登ってい



恵曇漁港の北沖防波堤突端より

く感じである。その猪目道には、古浦から六坊への林道の途中から山に入られるのだが、今はその林道が通行止めである。

経塚山は、角川日本地名大辞典には、西長江ではキノメ山、古浦では雲見岳と呼ばれていたとあった。標高は316メートルである。

参考書籍

『角川日本地名大辞典 32 島根県』 発行 角川書店 昭和54年

『出雲の山々とその周辺の山』 発行者 島根県勤労者山岳連盟 2011年

『出雲国風土記註論』 関 和彦 2006年 発行所 明石書店

『出雲国風土記』 読下し

「足日山（たるひやま）。郡家の正北（きた）七里なり。高さ一百七十丈、周り一十里二百歩あり。」

秋鹿郡 山条

本宮山 (ほんぐうさん) (「安心高野 (あしむのたかぬ)」)

風土記に云う安心高野は現在の大野町にある本宮山（標高279メートル）と考えられている。風土記の時代には、安心高野の付近は肥沃な土地で畑になっていたようで、山の頂上あたりの峰にだけ林があったらしい、それが神の社だった。つまり、樹林を神社とした山に籠る神を崇拝するものだったと考えられる。



水をひいた水田に映える本宮山 頂上にアンテナが立つ

この本宮山は、今は小型の乗用車で頂上まで行くことができる。広い頂上の一角には無線中継施設が建っており、周囲から本宮山と認識しやすい。頂上からは、晴れていれば眼下の宍道湖はもちろん



本宮山頂上から松江方向

大山、三瓶山なども一望でき、麓の高野宮の駅を通る一畑電車も遠望することができる。

頂上には、ここが戦国時代に山城だった大野氏城址の石碑と解説版が立っており、そこには、山城は大野荘を支配した大野氏が築城したもので、大野氏は尼子に従い出雲州衆の一人であったこと、尼子の後には毛利氏に従ったことなどが解説されている。

さて、本宮山の樹林であった神社は、風土記にある宇知社（うちのやしる）と考えられており、それは現在の高野宮（内神社〈松江市大垣町〉）という。その「高野宮社記」によると「安寧天皇の御代と霊亀元年（715年）の二度にわたり、高野山（現在の本宮山）の頂に夜々月輪のごとく光を



城址の石碑と説明版



一畑電車も見える景色



高野宮（内神社）本殿（県指定文化財）

放つものを見た住民が、四方から集まり、神の降臨と仰いで、神祀（かみまつり）を行った」とあり。なんとも神秘的なことが起こったらしいのである。

そのような伝承に興味を抱いて、高野宮に行ってみた。農道から高野宮を示す看板に従って脇道に入って坂道を

車が進むと、樹木がなくなり空が広がって大きな石の鳥居の前に出る。鳥居まで僅かな階段を上って境内に入ると左手に案内板が立ててあった。そこには神秘的な事が起こった霊亀元年（715年）に神垣を祀ったとあり、それから2年後の養老元年（717年）には、神威の強すぎる事を畏れた住民が現在地に遷御（せんぎょ）した、つまりご神体を移した



高野宮（内神社）境内より南を望む

とある。なんだかとても霊験あらたかなところとを感じる文面である。伝説では、その遷宮の地は高野山山頂から弓をもって矢を射て、その矢の落ちたところだそう

うだ。江戸時代には出雲大社、日御碕神社、佐太神社と共に松江藩の御祈祷四大社の一つになっており、一社一例の社して、出雲大社や佐太大社の支配を受ける事なく、松江藩直轄の別格な神社であったようだ。宍道湖岸の一畑電鉄の高ノ宮駅のすぐそばに、高野宮の大きな鳥居がある。奥出雲や宍道湖の対岸などから、多くの人が船で参拝しその人の列が続いていたことだろう。

『出雲国風土記』読下し

「女心高野（めぐころたかぬ）。郡家の正西（まにし）一十里二十歩なり。高さ一百八十丈、周り六里あり。土体（つち）豊に沃（こ）ゑて、百姓（おおみたから）の膏腴（うるおひ）の園なり。樹林（はやし）なし。但、上頭（いただき）に樹林あり。これ則ち神の社なり。」

秋鹿郡 山条

15

十膳山(じゅうぜんやま) 〔都勢野(つせぬ)〕

山頂に花畑がある十膳山は、松江市大野町と出雲市伊野町との境にある。標高は194メートルほどの低山である。



南側からの十膳山

私は2月の春めいた日に初めて登った。殿山という集落の正一位稻荷神社の手前にあった民家で、空き地に車を止めさせてもらおうと、山道が分かりにくいかもしれないと言われた。林はうっそうとして薄暗かったが、道は案外はっきりしてお



頂上に咲く桜

り、登り始めが標高100メートルぐらいだから呆気なく明るい山頂に着いた。

そこには数本の桜の木が蕾を抱え、足元には、スイセンが白い花を咲かせていた。休憩用の小ハウスもあって、その外にあった洋風の丸テーブルの椅子に



頂上からの宍道湖・大山

座った。宍道湖の湖岸が奥へ奥へと遠くの大山まで曲線美を奏でる風景だ。そのまま、ただ、ぼーっと眺めていられた。

しばらくすると、登山姿の中年の夫婦が登ってこれ、挨拶を交わすと、旦那さんが地面を見るなり、おっ！ 芝桜があるよ！ こっちにはチューリップ、百合も咲くんだなーと。花はなくとも名前が分かるのだ。

山頂は九十歳にもなろう伊野の多久和さんが十数年かけて整備されている。ここは麓で聞いた花畑なのだ。「これは、もう一度来なくっちゃ。」と奥さん。

十膳山は、『出雲国風土記』の時代には、都勢野（つせぬ）と呼ばれていたようで、茶白山と同じ草山だったのだろう。その様子には、山中には沢があって、周りには藤（ふじ）や荻（はぎ）、芦（あし）、茅（ち）などが生い茂っている。沢には鴛鴦（おしどり）がいたとある。沢や池は見かけなかったが、じめっとした山道だった。

戦国時代には、尼子氏の武将、宮倉一族の山城があったが、毛利軍との壮絶な合戦の末に万策尽き果てて滅亡した。江戸時代中期になっても松江藩の武士たちは、主君のために戦に散った武将を偲び、居城した十膳山を「殿山」と呼んでいたという。

四月初め、今度は出雲側から、青空の広がる登山道を20分ほど歩いた。丸テーブルに女性三人が手作りの料理を広げて賑やかだった。花畑満開の山頂から大山が春霞の奥に見えていた。

『出雲国風土記』読下し

「都勢野（つせぬ）。郡家の正西一十里二十歩なり。高さ一百一十丈、周り五里あり。樹林なし。嶺の中に沢あり。周り五十歩あり。四よもの涯（きし）に、藤（ふじ）・萩（おぎ）・芦（あし）・茅（ち）等の物、叢（むら）がり生なり、あるは叢（む）り峙（た）ち、あるは水に伏せり。鴛鴦（おし）住めり。」

秋鹿郡 山条

室山 (むろやま) (「今山 (いまやま)」)

この室山の山頂は、松江市大野町と出雲市伊野町の境になっている。山の姿、山容は大野町の奥にある上根尾の方からが美しい姿を一望できる。写真の真ん中の高まりに山頂がある。



室山、中央の高まりに山頂がある

山頂に向かうには、伊野町に登山道入り口があった。山頂にあるとされる三角点の名称は、四等三角点「三ノ谷」（標高252.57メートル）である。その三ノ谷（みのだに）集落から登る道があった。三ノ谷にある新宮神社の西側にある家の脇から登っていく。距離はおよそ900メートルで標高差は150メートルほどである。登山道は、ほぼ整備されていた。山頂は雑木林となっており、眺望などはひとつもない。登ってくる途中にも無い。



眺望の無い山頂（左奥に社日碑）



頂上に横たわる社日碑

頂上で三角点を探し回っていたら、文字の刻まれた石があった。刻まれた文字が「社日」と読めた時は、ここに神社があったのかもしれないと思った。この石碑は社日さんだ。社日とは、その土地の産土神（うぶすながみ）を祀る日のことで、春と秋にあって、春のものを春社（しゅんしゃ／はるしゃ）とい

い、秋のものを秋社（しゅうしゃ／あきしゃ）という。春分（3月20日頃）と秋分（9月23日頃）のそれぞれに最も近い戌（つちのえ／いぬ）の日を指す。戌には大地や山の意味がある。出雲地方には、五角形をした社日塔が畑の一角や神社の境内に立てられていることが多く、五角形の各面には、天照皇太神、大己貴命、少彦名命、埴安姫命、倉稲魂命などと刻まれている。この山頂にあるのは、五角形ではないが、おそらく社日塔であろう。五穀豊穡を祈る場所が山頂にあるのだ。昔、ここに神社があったのだろうか。

さて、探し回った四等三角点は、その社日の石碑の南側10メートルぐらいの藪の中にあった。三角点を示す石の標柱と立札があり、立札の文字は藪に隠れていたためか、「国土地理院」の黒い文字がはっきりと残っていた。



三ノ谷三角点

『出雲国風土記』読下し

「今山（いまやま）。郡家の正西（まにし）一十里二十歩、周り七里あり。」

秋鹿郡 山条

ヒストリー作成体制

- 事務局：松江市文化スポーツ部松江城・史料調査課、文化財課
- 本文執筆：島根半島四十二浦巡り再発見研究会 三代隆司
- 協力：『古都まつえ』編集長 高橋一清氏に多くのご配慮をいただいた。
- 編集：文化スポーツ部、丹羽野裕が松江市文化財保存活用計画協議会および事務局内で協議をして編集した。

松江のヒストリー集 5

『出雲国風土記』と松江のヒストリー【エッセイ集】

エッセイ2 『出雲国風土記』の山 登頂記

－「風土記の山」の風景と魅力－

令和8年(2026)3月30日

松江市文化スポーツ部 松江城・史料調査課

